

《温故知新プロジェクト》

福島県における保育者の実態調査  
—フォーカス・グループ・インタビューによる質的分析—

守 巧<sup>\*1</sup> 齊藤 崇<sup>\*2</sup> 佐藤 杏子<sup>\*3</sup> 鈴木彩香<sup>\*4</sup>  
佐久間真美<sup>\*5</sup> 佐久間奈穂<sup>\*6</sup> 椎根 李佳<sup>\*7</sup> 佐藤 遥香<sup>\*8</sup>

Fact-finding Survey of Childcare Workers in Fukushima  
—A Qualitative Analysis of Focus Group Interviews—

Takumi MORI, Takashi SAITO, Kyoko SATO, Ayaka SUZUKI, Mami SAKUMA, Nao SAKUMA,  
Rika SHIINE, and Haruka SATO

Ⅰ. 問題

2011年3月11日発生した東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故発生で、福島県を中心とした住民に放射能に対する大きな不安を与えた。事故収束には、40年以上の年月が必要とされ、未曾有の事故といえる。さらに事態を混乱させたのは、放射線物質の飛散であった。拡散についての情報開示の遅れや内部被ばくの線量の基準値が曖昧だったことなどの政治的判断の遅れが住民の不信感を抱かせ、福島県民が抱く健康不安の助長につながった<sup>1)</sup>。これらのことから、福島県において、子どもの健康に関する不安を抱えたまま子育てをしている保護者は多い。目に見えない不安や恐怖に加えて、保護者同士における放射能への見解や行動の相違があり、不安が拡散している現実もある。

このような状況下において、福島県における保育者は子どもの健全な発達を保障するため、環境の回復を目指す活動（園環境における除染等）や保育活動の充実を目指す活動（室内遊びの充実や検討等）などを不断的な努力で補完してきた。今日までに、保育現場の経済的負担、保育者の労働時間、精神的負担が拡大しながらも、保育及び子どもの本来の在り方を模索する営みがなされている。

保育者によるこれらの営みに反し、放射能に関する科学者の意見は、多様性に帯びている。その理由として、まずは極めて複雑な要素が絡み合っていることが挙げられる。具体的には、環境汚染の影響が外部被ばく（大気中に散っ

た汚染物）と内部被ばく（汚染された食べ物や飲料水）の双方が影響を与えていることである。次に、多様な汚染物質が付着・残留する地域や場所が微妙に違うことである。最後に、被ばくの状況は個人の健康状態に依拠している部分があることである。

これらのことから、保育者が一貫した指標に基づいて保育実践をする難しさがある。放射能に関する保護者間での意見等の相違は先述したが、実は「保育者-保育者」「保育者-保護者」でも相違が生じている現実がある。状況認知のズレや物事の優先順位のズレなど、多様な場面でのズレが生じていることが予想される。

このように放射能被災地における保育現場では、日常的な困難を抱えており、これまでの知見や他の地域での課題とは一様に論ずるには限界があることがわかる。

では、これまで行われてきた先行研究はどのようなものであろうか。これまでの福島県における放射能被災地の諸研究は、震災後の子どもの心理状況及び行動変化の実態調査（たとえば金谷, 2012<sup>3)</sup>; 佐野・糟谷, 2013<sup>4)</sup>; 一般社団法人日本保育学会, 2013<sup>5)</sup>）が多くを占めている。これらの研究の多くは、質問紙などによるアンケート調査が主である。

これらの研究は、全体的状況を捉えることや保育の実態を把握することに留まり、保育そのものを創造している保育者の内情に迫り切れておらず、これまで継続的に子どもと接してきた者の感情の揺れや機微等が明らかにされていない。これまで誰も経験したことがない状況下で、保育実践上の困難を抱えながら保育を営んできた保育者の心理を明らかにすることは、今後同様の災害に見舞われた際の大きな指針となるはずである。

そこで、本研究ではより深い質的資料から保育者の実態を分析する。そして、振り返りを通してこれまでの保育者の心情や心の動きを詳細に検討し、放射能被災地における保育者が今日まで、置かれてきた状況や心の動きのプロセ

<sup>\*1</sup> 東京家政大学 (Tokyo Kasei University)  
<sup>\*2</sup> 淑徳大学 (Shukutoku University)  
<sup>\*3</sup> 桑折町立伊達崎幼稚園 (Danzaki Kindergarten)  
<sup>\*4</sup> 田村市立滝根保育所 (Takine Nursery School)  
<sup>\*5</sup> 田村市立常葉保育所 (Tokiwa Nursery School)  
<sup>\*6</sup> 郡山市立富久山保育所 (Fukuyama Nursery School)  
<sup>\*7</sup> 福島市立野田保育所 (Noda Nursery School)  
<sup>\*8</sup> 福島文化笹谷幼稚園 (Fukushima Bunka Sasaya Kindergarten)

スを明らかにすることを目的とする

## II. 方法

1. 調査方法：公立保育所保育士に対する半構造化面接法によるフォーカス・グループ・インタビュー（FGI）を実施した。
2. 調査時期：2015年7月
3. 調査対象者：福島県中通りで勤務する保育所保育士10名である。震災当時、保育経験6年目（1名）、1年目（7名）、保育者養成校の学生（2名）である。
4. 面接時間：60分程度
5. 分析方法
  - ①インタビュー実施後、逐語録に起こして、文字データとした（総文字数13,446文字）。
  - ②文章全体の文脈の意味を解釈し、縮約データを作成し、さらに縮約データから抽出した重要語句を用いコードを作成した。
  - ③観点ごとに共通の意味内容をもつコードを集約し「サブカテゴリー」を形成した。
  - ④サブカテゴリー間の意味内容や関係を考慮しながら、最終的に「カテゴリー」を作成した。
  - ⑤それらの中で類似性がある項目を保育者の心の動きや保育中の配慮点や工夫していること、あるいは現状などの視点から「放射能被災地における保育者の心情の要因相関図」としてまとめた。
6. 倫理的配慮

研究への参加は対象となる本人の意思を尊重し、研究目的・方法、拒否や中断の権利等について依頼状と口頭で十分に説明し、同意書に署名し研究終了まで保存しておくことを約束した。得られたデータは対象者のプライバシー保護に十分留意して、保存及び処分することにした。なお、本研究は東京家政大学研究倫理委員会での承認を得ている（狭 H27-04）。

## III. 結果

分析の結果、【時間の経過】、【保育者の意識】、【現実への気づき】、【保育業務の不全】の4カテゴリー、《意識の風化》、《理解の欲求》、《保育者の意識》、《現実に直面》、《プライベートからの影響》、《研修の不一致》、《保育実践の欠如》、《保護者支援の混乱》の8サブカテゴリー、〈薄れてくる〉、〈気にしなくなる〉、〈忘れていた〉、〈現状を知ってほしい〉、〈考えないようにする〉、〈思い出したくない〉、〈気にしなくなった〉、〈話をしてスッキリする〉、〈話して振り返れた〉、〈放射能の話でストレスを感じる〉、〈偏見を持たれる〉、〈研修に辟易する〉、〈求めている研修ではない〉、〈通常の保育実践がわからない〉、〈意識的に身体を

動かそうとする〉、〈保護者支援で失敗する〉の16コードが抽出された（表1）。

これらを互いに影響を及ぼしているもの同士を統合・関連付けながら図式化を試みた（図1）。

放射能被災地における保育者は、保育実践に際し、他の地域とは異なる状況にある。そこで、自己研磨や現状改善にむけて積極的に研修などに参加するが、現状に則していないなどの《研修の不一致》が生じてしまう。あわせて、屋外での保育活動が十分にできないことからこれまでの保育実践がわからなくなってしまったり、室内での充実した運動を奨励したりするなど《保育実践の欠如》に直面する。さらに被災者でもある保護者への支援をしているものの、自身も被災者であり、かつ通常の保護者支援とは一線を画すことから《保護者支援の混乱》が起きてしまう。このように【保育業務の不全】が多様な場面で起きてしまう。

しかし、このような状況ではあるものの震災から月日が流れているので、被災地である自覚が乏しくなるという《意識の風化》が起きたり、他の地域の人から放射能被災地について忘却される危機感から《理解の欲求》を欲したりする。保育者は、被災に対する意識が「自分」も「他者」も乏しくなるため、否応にも【時間の経過】を感じている。

次に、これまでの体験を仕事でもプライベートでも振り返る機会がないことから自分の心理状態を整理していないという《現実に直面》したり、自分が《プライベートからの影響》を感じていなかったりするため、【現実への気づき】が乏しくなる。

これらが複雑に交錯しながら自分の心理状態を「無意識」「意識」問わず【保育者の意識】に強く影響を与えていることがわかった。

## IV. 考察

### 1. 揺れ動く心情を理解した支援の必要性

図1からもわかるように、時間の経過が、大きく保育者の心情に影響を与えていることがわかる。震災直後と今日とでは、「置かれている状況」「人間関係」「物的環境」などに相違がある。したがって、時間の経過と共に抱える悩みや放射能被災地への思いが変化していくことが予想される。放射能被災地という環境下においても順応しようとする保育者の心情が垣間見ることができる。適応し、生きていくために、自ら考えすぎないようにする、いわゆる「積極的な風化」が生じていることが予想される。このことから、放射能被災地の保育者に対する支援には、保育者が揺れ動いている心情を把握した支援が前提となる。あわせてプライベートからの影響を受けていることが考慮すると、

表1 放射能被災地における保育者の心情要因

【カテゴリー】	《サブカテゴリー》	〈コード〉	語り
【時間の経過】	《意識の風化》	〈薄れてくる〉	・何か目先のことばかりになっちゃっていて前のことを振り返るという時間も無かったりとか別なところに気が向いているところがあって、忘れちゃいけないことなんですけど、やっぱり年々こういうのが薄れてきてて。 (他4事例)
		〈気にしなくなる〉	・(放射能について) 気にしなくなってきた、何でだろう？う～ん…麻痺しているのかも。 (他3事例)
		〈忘れていた〉	・まずは、今が異常な状態や環境で保育してたんだなっていうことに気づかされたなって思いました、何か、忘れてたっていうか、最初は大変だ大変だと思ってましたけど、今は…。 (他4事例)
	《理解の欲求》	〈現状を知ってほしい〉	・そういう苦しさっていうか、そういうのは知って、何を、何だろう…してほしいとかなないんですけど、せめて福島のことを知ってもらえたらなって思います。 (他3事例)
【保育者の意識】	《保育者の意識》	〈考えないようにする〉	・外に出れない状況が普通じゃないけど、普通じゃないって思いながら保育してなかったというか、何ていうんだろ、いつも通り、いつも通りっていう感じでやっていたので、そう思うことでちょっと、何か頑張ってるって立ってたみたい、何かあんまり意識はしないっていうよりは、私は、考えないようにしてたっていうか、ちょっと別物じゃないんですけど、考えなきゃいけないところは考えなきゃいけないけれど。 (他9事例)
		〈思い出したくない〉	・そういう人達はおそらくすると、大変だったところを目をつぶってて、大変だったことを見たくないというか、思い出したくなくてっていうのがあったのか～って思ったり。 (他3事例)
		〈気にしなくなった〉	・もう日常的になりすぎてから気にしなくなりましたね。非現実的なんですけど、“言われれば” という感じです。 (他2事例)
【現実への気づき】	《現実と直面》	〈話をしてスッキリする〉	・今日、自分の話を聞いてもらって、こういうことだったんだな～とか、実際に子どもたちにこんな問題が、本当にあるんだなっていうのも気づいたし、聞いてるよりも自分で話した方が気づくことが凄く多くて、すごくスッキリしたっていうのも何か変ですけど、そういうのをものすごくありがたい、いい機会だな～って思いました (他3事例)
		〈話して振り返れた〉	・いつも通りのっていうのを必要以上に頑張ってるやろうとしてたんだなっていうふうにはお話しして思うところではありましたが、何かそこは頑張らなくてもいいかなって。こういう機会じゃないと振り返れなかったかも。 (他3事例)
	《プライベートからの影響》	〈放射能の話でストレスを感じる〉	・放射能の話はいちいち嫌です。緊張が走るというか、ストレスです、正直。 (他3事例)
		〈偏見を持たれる〉	・いろんなネットとかでも、いろんな情報が、え？っていう情報とか出るじゃないですか、福島県の人めっちゃ鼻血出してますっていうのを描いて、しかも福島の人がそういった、とか。ね～嘘の情報が、描かれて、放射線にやられたみたい、でも全然鼻血なんて出てないし、そういうのも印象とかよくないし、自分から他県にいくとき思っちゃいます、福島から来たって言えない、こんなとこに来てすいません、みたい。 (他3事例)
【保育業務の不全】	《研修の不一致》	〈研修に辞易する〉	・大変だった自慢話みたいな。そんな感じです、某大学の先生はしゃべってすっきりしたんだろーけど (笑)。 (他5事例)
		〈求めている研修ではない〉	・今思うと、保護者支援の研修は必要だったんじゃないかなって。でも、震災後はまったくなかった。放射能の研修は話をする人によってばらばらだったし。正直、いらなかったです。 (他4事例)
	《保育実践の欠如》	〈通常の保育実践がわからない〉	・本来の保育の姿が、何かどんなだったんだろ？今は時がたって、何か震災が遠のいちゃってるというか、これが本来の保育なんだよなって思うけど、違うんだよなって…、何かわからなくなってます。 (他2事例)
		〈意識的に身体を動かそうとする〉	・いつもやっぱり計画たてる時とかは、ここにはあってその中でできる範囲とか、体を動かすっていう固定での計画で年間に入ってるんですよ、必ずいれなきゃいけない項目に入ってるんです、なので、週のねらいにも月のねらいにも運動の観点で絶対に入れろって言われてるので。 (他5事例)
	《保護者支援の混乱》	〈保護者支援で失敗する〉	・心理的に悩んでるお母さんとは聞いてたんですけど、入り込みすぎちゃったっていうか、話をきかなくちゃ、聞かなくちゃって思うあまりに、うまいところで線引きが、できなかった…。ダメでした。 (他5事例)

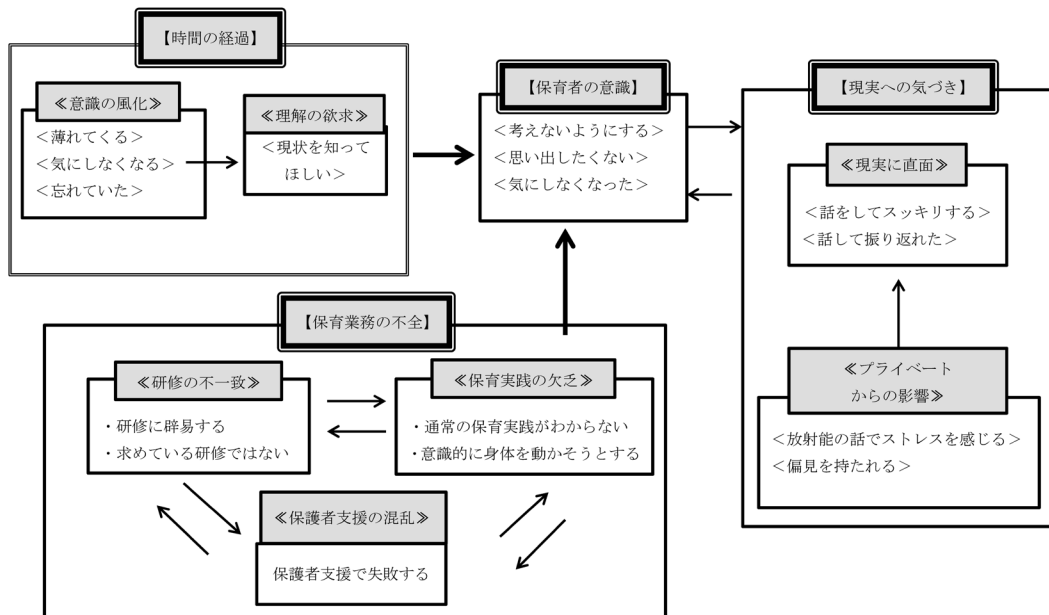


図1 放射能被災地における保育者の心情要因相関図

一様な支援というよりも個人的な体験も含まれることから、個別性を重視した支援が求められる。

## 2. 保育者主導の研修内容の精査の必要性

これまで、そして現在でも福島県では多様な研修が実施されている。しかし、本研究の結果では、研修会の内容が実態にあっていない現状が浮かび上がった。保育者のニーズに合致した内容ではなく、かつ放射能関連の知識の増加を主にした内容になっていたと考えられる。したがって、日々の保育実践に反映する即効性が高い研修内容が求められる。また、本研究でも抽出された〈話をしてスッキリする〉、〈話して振り返れた〉のように、保育者による語りが自身の心理状態に大きく影響を与えることを考慮すると保育者が能動的に参加し、コミュニケーションが図れる研修内容も求められる。具体的には、現場に即した内容を目指すのであれば、保育者を対象としたアンケートを参考にしたり、少人数にした研修を増加したりするなどの工夫が必要である。

特に、放射能被災地では、一様に地域別にわけて放射能に関する研修を選定しても風向きや地形によって被災量にばらつきがある。この点でもより個別的な研修の実施が求められよう。

## 3. 子どもの環境整備ばかりではなく「支援者支援」の必要性

激変した環境への改善や具体的なアプローチに関する研究は、多様な立場から多様な意見が出されている。また、震災や放射能の被災により、子どもの身体的・心理的負担に関する実態調査も行われている。一方で、本研究のような保育者の現状把握、あるいは保育者としての役割・あり方を明らかにする研究は皆無に等しい。本研究では特殊な心情であることが浮かび上がってきたが、まずは現状を把握したうえで、それに対する支援策を講じる必要があると考える。したがって、放射能被災地における保育者を対象とした研究の知見の蓄積が求められる。

## 文 献

- 1) 境野健児 (2013) 放射能汚染への父母の不安と学校の受容. 日本教育学会大会研究発表要項 72, 234-235
- 2) 荒川亜樹: 東日本大震災において福島県の保育労働者が果たした役割—自由記述分析からみる、放射線被害下での保育実践の実態と課題—. 総合社会福祉研究 (42), 39-51 (2013).
- 3) 金谷京子 (2012) 東日本大震災後の保育の場における子どもの変化: 関東地区の保育者への実態調査から, 聖学院大学論叢第25巻 (第1号)
- 4) 佐野法子, 糟谷知香江 (2013) 被災した乳幼児の行動の変化: 福島県いわき市における保育士・幼稚園教諭への調査から. 応用障害心理学研究 (12), 27-41
- 5) 一般社団法人日本保育学会 (2013) 震災を生きる子どもと保育. 日本保育学会震災時における保育問題検討委員会報告書